

「映画の中で生き続ける」

11

「わたくしは死んではいけない
わたくしが死ぬとき

あなたがほんたうに死ぬ」

つい最近の新聞紙上で、永田和宏さんという歌人が亡き妻のことを歌った短歌が、目に止まった。

丁度インドネシアでの、自作『いまはむかし～父・ジャワ・幻のフィルム～』の上映巡業から帰った頃だった。戦時中、父が三年半にわたってインドネシアで国策映画を創り続けたことを描いた映画だったので、もう遠い昔に死んでしまった父が行きたかったに違いないインドネシアを、80年ぶりに再訪する旅でもあるのだ…と思い入れをしながら旅をした。

父が働いた撮影所、父が訪ねた史跡、父が好きだった歌♪ブンガワンソロ♪のソロ河の水の流れ…。しきりに父のことを想いながらの旅だった。

地味な記録映画を職人的に創り続けた父だったから、もう映画人としては忘れられた存在かもしれない。けれども『いまはむかし』という一本の映画が出来たことで記憶にとどめてもらえたら、と思っている。

私を含めた三人の子どもを女手ひとつで育てたのは、母だった。父のことは、まだ仕事仲間が覚えていても、母のことは世間的にはほとんど忘れられているのだろう…。

でも、私が生きている限りは、母も、生き続けている。私の記憶の中で、しっかりと息をしている。

父や母のことをしきりに想うようになったのは、いつ頃からだろうか？ 年を重ねれば重ねるほど想うようになった気もする。

父や母ばかりでなく、旅立ってしまった友人たち一人ひとりの顔が浮かんで、寝つけなくなるような夜もある。

みんな私の記憶の中で生き続けている大切な「いのち」なのだ。

映画『いまはむかし』の導入部で、私が墓参りをしながら、「映画を一本一本創るのって、お墓を創って墓碑銘を入れていくのに似ているかも知れない…」と呟くシーンがある。

インドネシアから帰ったその日に、五月に急逝した学生時代の友人、遠藤滋を描いた映画『えんところ』と『えんところの歌』の追悼上映会が世田谷であり、駆けつけた。山口と静岡でも、遠藤の追悼上映会を予定している。私の呼びかけに呼応して、自主上映に取り組んでくれているのだ。

私にとって、遠藤を追悼することは、映画を観てもらうことだ…と気付いたからだ。『えんところ』『えんところの歌』を上映する限り、遠藤滋は生き続ける。忘れられない存在となる。

『いまはむかし』を上映する限り、父・伊勢長之助は生き続ける。父が生きた時代、「戦争の記憶」も生き続ける。

「奈緒ちゃんシリーズ」の名脇役、『ぴぐれっと』のサブちゃんが旅立ったという報せが入った。『奈緒ちゃん』『ぴぐれっと』『ありがとう』『やさしくなあに』四本の映画が上映される限り、サブちゃんは生き続ける。

ますます前ノメリになって、自主上映に取り組もうと思う。上映を続けることで、生き続ける一人ひとりがいるのだから。

上映を続けなければ、いけないのだ。

私は死んではいけないのだ。

映画の中で生き続ける、

大切な一人ひとりのために

生き続けるのだ。

よろしくお願いします。

伊勢 真一